

パネル

西田幾多郎の宗教思想

代表者・司会 藤田正勝
コメンテータ 森 哲郎

西田幾多郎の宗教思想の特質

小坂 国 継

西田幾多郎がその生涯をかけて探究したのは「自己とは何か」という問題であり、またそれと連関して「自己の根源は何か」という問題であった。そして、この二つの問いは必然的に「自己と自己の根源はどのような関係にあるか」という問題に帰結する。この三つの問いはじつは一つの問いであり、一つの問いの三つの契機である。自己を問うことは同時に自己の根源を問うことであり、またそうした根源と自己との関係を問うことである。こうした問題意識は西田のどの時期の思想においても通底してみとめられる。

このように西田哲学の課題は一貫して「己事究明」にあり、この点からすれば、それは一個の宗教哲学といってよいほど宗教的色彩が強い。ただ西田哲学においては、自己と自己の根源はつねに相即的關係にあると考えられているので、この己事究明が同時に「世界究明」と並行して、否、むしろ世界究明に即しておこなわれている。

具体的実在界は、当初、「純粹経験」の世界と考えられたが、

やがて純粹経験自身の「自覚」の世界と考えられるようになり、さらにあらゆる自覚が「そこに於てある」形而上学的な「場所」的世界と考えられ、最終的には、「絶対無の場所」の顕現である弁証法的な歴史的世界と考えられた。それで、西田の宗教哲学は究極的には彼の歴史哲学でもあった。歴史的現実界はその根底において宗教的構造を有していると考えられたのである。

では、自己とその根源はどのような関係にあるだろうか。当初、西田はそれを単純に同性的関係と考えていたが、しだいに相即的關係と考えるようになり、最終的には絶対矛盾的自己同一的關係あるいは逆対応的關係と考えるようになった。自己と神仏との關係は、一言でいえば、内在的なものが超越的なものであり、超越的なものが内在的なものであるという關係である。そして、この点で、西田の宗教観はキルケゴールのそれと驚くほどの親和性を有している。神は自己を否定して人間となり、人間は自己を否定して神と接する。神は超越的であると同時に内在的であり、人間は内在的であると同時に超越的である。キルケゴールも西田もこの根源的事実を承認する。

けれども、キルケゴールにおいては超越的なものは自己にとつて絶対に他者なる者であり、しかもそれが自己に内在的であると説かれる。神は超越的内在である。しかし、西田にとつてはむしろ超越的なものは絶対に自己なる者であつて、内在的なものが自己にとつて超越的であるのである。したがって、仏や絶対無は内在的超越である。この点では、両者の考えは対極的である。西田のキルケゴールに対するアンビヴァレントな態度

はここから生じている。

しかしながら、西田においては絶対と相対はあくまでも絶対矛盾的自己同一的關係あるいは逆対応的關係にあるのであって、両者は一体不二なるものとは考えられていない。少なくとも、そうした要素は希薄である。相対の行為の一方が絶対的なものや永遠なものに触れているということはいわれているが、相対が絶対であり永遠であるとははいわれていない。けれども、西田の考えを徹底させれば、自己と絶対無はただ逆対応的に接しているのではなく、端的に自己が絶対無であり、絶対無が自己であるといわなければならないのではなからうか。それが「絶対無の自覚」の本来の意味であらう。

しかるに、西田哲学における「絶対無」はどこか絶対到自己的であると同時に絶対到他者的であるという要素を含んでいる。それは「絶対矛盾的自己同一」や「逆対応」の論理を見れば明白であらう。この点で、西田の絶対無の概念はまだ不徹底であるともいえるが、しかし逆にそのことがキリスト教や浄土真宗における人格的・超越的な神(仏)をも排除することなく、その思想の内に包摂し得る無限の包容性の要因となつていてもいえるであらう。

西田の宗教思想とキリスト教的終末論

浅見 洋

本発題では終末論理解に言及することによつて、後期西田哲学における宗教論の特徴とその現代キリスト教神学における可能性に論究する。

宗教論には《絶対的一者の自己否定的肯定として、我々の自己が成立するのである。故に我々の自己は、自己否定に於て自己を有つ。我々は何処までも宗教的である。而して又此故に我々の行動の一方が歴史的であり、絶対現在の自己限定として終末論的 (eschatologisch) と云ふことができるのである》(⑩三五四) とある。そのように我々の自己が絶対現在の自己限定として成立し、行為の瞬間において永遠に接しているという事態を西田は終末論的と呼ぶ。絶対現在とは無限の過去と無限の未来を自己矛盾的に含む現在であり、キルケゴールが永遠の今と呼ぶ瞬間 (Augenblick) に他ならない。神学史において絶対現在の自己限定を終末論的と呼ぶようになったのはバルト『ローマ書』以降である。両者の終末論は絶対現在の自己限定、ないしは絶対者と歴史的世界の弁証法的關係を終末となすがゆえに《現在の終末論》と規定できる。また、終末を絶対者と自己の出会い、自己覚醒の場とみなすという点で、終末論の脱黙示文学化、実存的理解が遂行されたともいえる。また、西田は《私の終末論的》と云ふのは、キリスト教のそれと異なつて